

伊吹町文化財調査報告書第9集

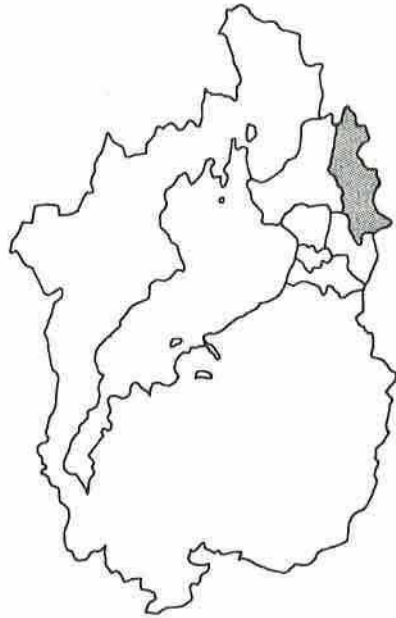
内座遺跡発掘調査報告書

1995.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第9集

ないざ
内座遺跡発掘調査報告書



1995.3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

町北中部をしめる東草野地区は、清き姉川のながれに沿う、緑おおい山村です。その瀬音に耳をかたむけ、うっ蒼たる森の中をながめると、太古の人々の息吹を感じ、遠い過去との対話を覚え、先人の残した足音を身近に聴くことができます。

今回、上板並内座地区で、団体営ほ場整備事業が計画されました。現代の農業生産活動に適した水田へと変える事業です。これに先立つ発掘調査で、中世のものと思われる水田跡が見つかりました。山林を人力で切り開いていった、われわれの先祖の努力の結晶です。わずかな調査面積ですが、東草野地域がどのように開かれていったのかを物語る貴重な発見です。

また、調査で得られた縄文土器は、たとえそれが小さな破片でも、縄文時代から現在にいたる、歴史と創造を伝える貴重な資料です。出土した土器や記録保存の成果は、将来においても過去への豊かなイメージをあたえる資料となるでしょう。この報告書が、今後の学術研究の一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理等にあたり、関係諸機関・各位の温かいご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。とくに、現地における調査に際しましては、地元老人クラブの方々に多大なるご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

1995年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河竹二郎

例 言

1. 本書は文化庁・滋賀県の補助を受け、平成6年度国庫補助事業として実施した、滋賀県坂田郡伊吹町大字上板並字内座1177番地に所在する内座遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、姉川中部団体営ほ場整備事業の事前調査として、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受けて、伊吹町教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査は、平成6年(1994)5月から7月にかけて実施し、調査終了後、整理および報告書の作成をおこなった。
4. 現地調査は伊吹町教育委員会生涯学習課技師・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体 伊吹町教育委員会 教育長 石河竹二郎

調査事務局 伊吹町教育委員会 生涯学習課

課長 森 三郎 主任 的場文男

主任 堀 代々子 主事 甲斐沼和弥

調査作業員 上板並老人クラブ会員（氏名はあとがきに記載）

瀧澤康仁 山田 卓 横田泰規 西川 宏 的場成一

後藤美智子 平山勝子

5. 遺物の整理・実測に関しては、上記作業員のうち瀧澤、山田、横田でおこなった。
6. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表す次第である。

伊賀並秀雄（上板並区長）・伊賀並義巳（ほ場整備組合長）・伊賀並勝（上板並老人クラブ会長）

谷口 徹（彦根城博物館）中村健二（滋賀県教育委員会）・中井 均、土井一行（米原町教育委員会）・宮崎幹也（近江町教育委員会）・桂田峰男（山東町教育委員会）

7. 出土遺物の写真撮影については寿福写房（寿福 滋氏）にお願いした。
8. 植物珪酸体分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 遺物の番号は、本文中・挿図・図版ともに対応する。
10. 本書の執筆、編集は高橋順之がおこなった。なお、第6章は、パリノ・サーヴェイ株式会社の報告書を掲載した。

本文目次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の経過	5
第4章 調査の結果	6
第5章 出土遺物	9
第1節 土器	
第2節 木製品	
第6章 水田遺構の植物珪酸体の産状	17
第7章 まとめ	20

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区位置図	5
第3図 検出遺構平面図	8
第4図 土層断面図	8
第5図 出土遺物（中世）	10
第6図 出土土器（縄文時代後期）	12
第7図 出土土器（縄文時代後期）	13
第8図 出土土器（縄文時代後期）	14
第9図 出土土器（底部・晩期）	15
第10図 出土木製品	16
第11図 資料採集地点の土層断面図	19
第12図 植物珪酸体組成の層位的分布	19

表 目 次

表1	分析試料の一覧	17
表2	植物珪酸体分析結果	18

図 版 目 次

図版1	植物珪酸体	
図版2	上：調査地遠景	下：調査前風景
図版3	上：調査風景	下：検出遺構全景（北から）
図版4	上：畦畔状遺構（南から）	下：畦畔状遺構
図版5	上：杭出土状況	下：調査区断面
図版6	上：出土土器（後期）	下：出土土器（後期）
図版7	上：出土土器（後期）	下：出土土器（底部）
図版8	上：出土土器（晩期）	下：出土遺物（中世）

第1章 調査にいたる経過

坂田郡伊吹町上板並には、周知の遺跡として内座遺跡が所在している。今回調査した当遺跡は、上板並集落の北部、姉川と足俣川が合流する地点の段丘上にある。

内座遺跡の発見は、平成2年度に伊吹町教育委員会がおこなった町内遺跡詳細分布調査の際に、荒起し後の水田地表面で素焼きの土器片を採集したことによる¹。この結果、周辺の小字名をとり、内座遺跡として、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条の6第1項の規定に基づいて、文化庁に「遺跡発見通知」を提出した。しかし、土器片は細片であったため、その所属する時代などがわからず、当遺跡の性格については不明のままであった。

今回、姉川中部団体営ほ場整備事業が、内座地区で計画されたため、事前調査として平成6年3月26・28日に確認のための試掘調査をおこない、その結果を受けて、5月10日から20日までと6月8日から7月8日にかけて現地における発掘調査を実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

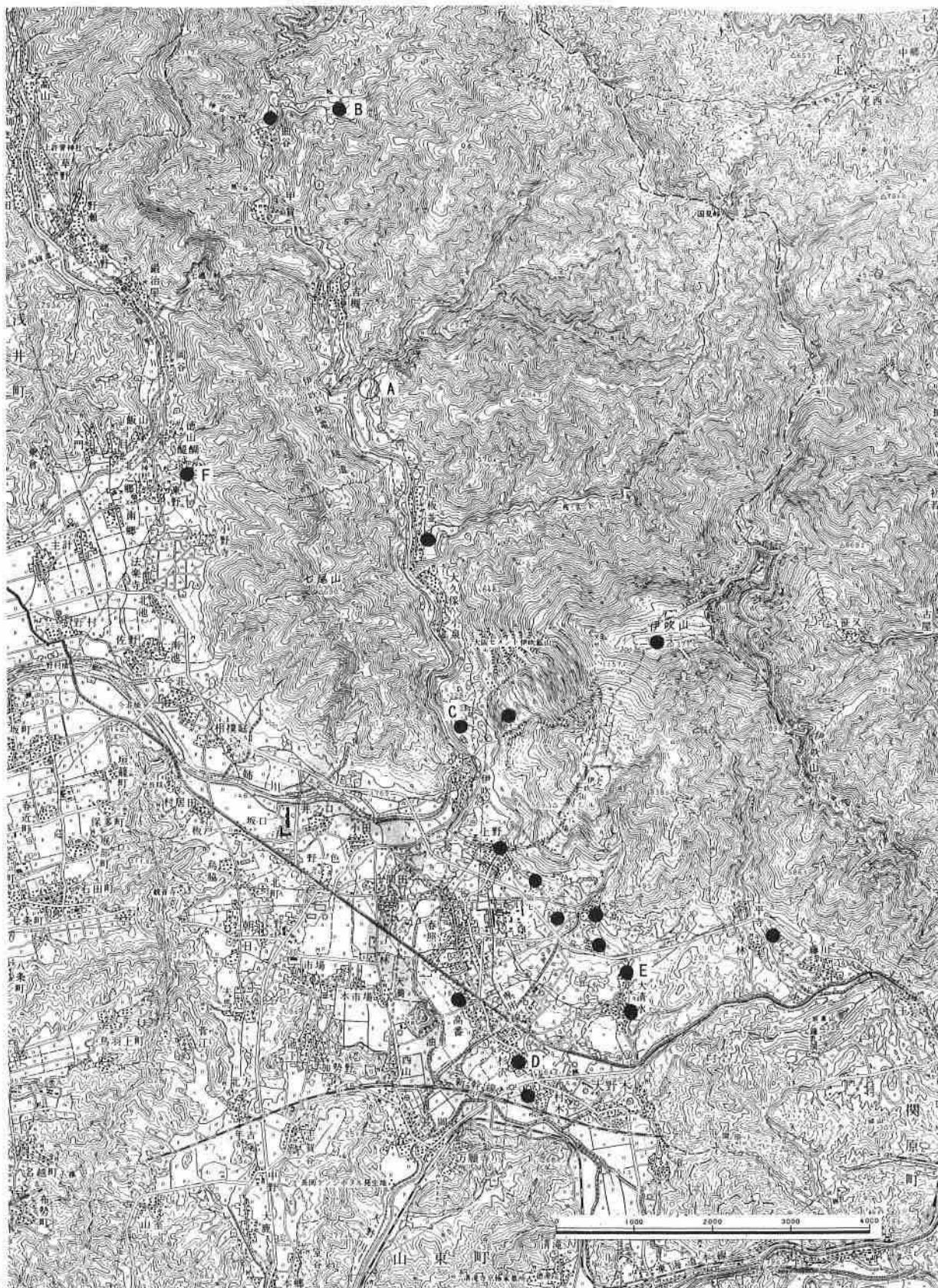
位 置

伊吹町は滋賀県の北東部の端に位置し、滋賀県と岐阜県の県境として南北に連なる伊吹山地の西に位置している。伊吹山地は、町のシンボルである伊吹山（1,377m 滋賀県の最高峰）を南端にして、標高1,000から1,200mの稜線や峰が北方に連なる。これが滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系との分水界をなしている。

北西および西は七尾山系を境に東浅井郡浅井町に接し、南西および南は坂田郡山東町に、東は岐阜県となり、北から揖斐郡坂内村、同郡春日村、不破郡関ヶ原町に接している。

町域は、東西7km、南北22.7km、面積109.17km²で帯状に南北に長い。地形的には山岳部が多い。町の北中部の各集落は姉川をつくる河谷部に立地し、南部の集落は伊吹山から流れてる弥高川・政所川・藤古川等が形成する複合扇状地上にある。

内座遺跡のある上板並は、町の中部にあり、北から南に流れる姉川の左岸の河岸段丘上に集落や畑がある。東は伊吹山地で、国見岳（1,128m）や虎子山（1,183m）など1,000m級の山があり、国見峠で春日村と結ばれる。西は七尾山塊の天吉寺山を境に浅井町になる。



第1図 遺跡位置図

(A. 内座遺跡 B. 起し又遺跡 C. 伊吹遺跡 D. 杉沢遺跡 E. 井の田遺跡 F. 醍醐遺跡 ● その他の縄文時代遺跡)

遺跡は、北隣の吉槻集落との境をなす足俣川が、本流の姉川に合流する左岸の高位段丘の山側にある。標高は約 264mをはかる。この段丘上は東西約 130m、南北約 110mで、地目は水田である。

自然環境

上板並が属する姉川上流地域は、ところどころで山がひらけて平地があり、田畑や集落になっている。これらは、すべて河岸段丘上につくられたもので、ほとんどの集落が姉川左岸に立地している。上板並付近では、河岸段丘が数段にわかれ、現在の河川敷を第一段丘とすると、現在の集落は第三段丘にあり、内座遺跡があるのは、これより高位の段丘面ということができる。

この地域の気象は、山峡に位置することから日照時間が少なく、最高気温と最低気温の差が大きく、降水量も多い。積雪量も姉川沿いに北上するに従って増加する。²

歴史的環境

伊吹町の北中部のうち、上板並の南にある下板並から、最北端の集落甲津原までの6ヵ字は、昭和31年まで東浅井郡東草野村であった。この地域の歴史については、伊吹町文化財調査報告書第8集『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』（石臼生産遺跡の項）で概観したので、そちらを参照いただきたい。

ここでは、今回の調査に関連する縄文時代および中世の東草野地域の歴史的な環境について紹介したい。

縄文時代晩期の有名な杉沢遺跡に代表される町域南部では、ほとんどの集落で縄文遺跡の存在が確認されている。その中で、その時期や性格があるていど把握できるものは、合口甕棺が出土している杉沢遺跡や、中期後半から終末を中心とする、東海色の強い土器を出土した井の田遺跡（大清水）、中期の船元式土器や彫刻の施された石剣が発見されている伊吹遺跡などがあげられるに過ぎない。³

しかし、周辺には、中期土器の標式遺跡となった、醍醐遺跡（浅井町）や番の面遺跡（山東町）があり、伊吹山麓が、滋賀県の縄文遺跡が集中する地域の一つであるともいわれている。

この伊吹山麓から北の姉川沿いの溪谷部である町北中部は、平成4年度、曲谷の起し又遺跡が調査されるまで、明確な縄文遺跡の存在が知られていなかった。起し又遺跡では、

平成6年度にも、ほ場整備事業に伴う発掘調査を一部でおこない、この2度の調査で、縄文時代中期末を中心にして、中期初頭から後期にかけての遺跡であることが判明している。また、1点ではあるが早期の押型文土器（穂谷式）が出土しており、姉川上流で古くから人々の営みがあったことがわかってきた。⁴

その他、曲谷のムカイラ遺跡でも縄文土器片がわずかにみついているし、今回の調査区の南隣の集落である下板並では、昭和4年頃に小字長谷ノ下で石斧が出土している。この件について、「長谷増五郎氏宅地の山裾を掘穿中、出土。磨製で、蛤刃、頭部を缺失し、刃部のみ10糎程を残存する」という記事がある。⁵ 図面や写真がなく、所属時期がわからないが、今回の調査結果をあわせて考えると、姉川上流の段丘上に縄文遺跡が点在していることが明らかになりつつある。

中世には草野庄に属した。草野庄は現在の浅井町の草野川沿いの上草野地域と、上板並の属す姉川上流の東草野地域で形成されていた。平治の乱で浅井町野瀬にある大吉寺に源義朝をかくまった草野定康にその所領が安堵されたことが、『吾妻鏡』文治三年（1187）二月九日条にみえる。室町時代は円満院、青蓮院門跡、大館氏（将軍近臣）によって分割領知された。また、京極氏が北近江を制すると下坂氏や上坂氏が当庄の代官職をつとめる。⁶

第3章 調査の経過

事前調査は、ほ場整備工区内において、内座遺跡の周知の範囲を中心として試掘調査を実施した。調査は、工事の掘削によって遺跡に影響をおよぼすと考えられる排水路や切り土工事部分に、約3m×4mの試掘トレンチをほぼ20m間隔で20ヵ所もうけ、0.4㎡級のバックホウで、遺構や遺物が認められる土層まで掘削した。

試掘調査の結果、約15～25cmの耕土を除去すると、多くのトレンチでは砂礫土や砂質土の堆積がみられた。また、トレンチ4～8および13～15では茶褐色粘質土が耕土の下に堆積していた。

このうち、トレンチ5および6の茶褐色粘質土層中（地表下約60cm）から、縄文時代の土器片が出土した。特にトレンチ5では比較的まとまって出土した。粘質土の下は青灰色粘土層で遺構面となる。これらの結果に基づいて協議をおこない、工事によって影響をおよぼす個所を発掘調査し、資料の記録保存化を図った。

調査区は、標高約265m付近に位置しており、段丘の山側にある。現地調査の方法は、バックホウを用いた表土掘削のあと、人力による遺構検出、遺構内の掘削をおこない、遺物の検出をしたあと、写真撮影や平面図の作成などを行なった。



第2図 調査区位置図

第4章 調査の結果

調査の結果、検出された遺構は、水田跡と考えられる畦畔（けいはん・あぜ）状の遺構と杭の列であった。これらは、おそらく室町時代（16世紀中頃）か、それ以降の時代に属するものと考えられる。出土した遺物の詳細は第5章で述べるが、縄文時代後期を中心にして、若干晩期の土器片が、この遺構面の上に堆積していた茶色系砂質土の中に含まれていた。また、畦畔状の遺構面で室町時代の天目茶碗などが出土している。

その他の時期に含まれる遺物はなかった。

土層

今回検出した遺構は、この河岸段丘の中で比較的山に近いところに位置している。この段丘は、もっとも高い水田と低い水田との直線距離は約13m、その間の比高差は約6mである。また、調査区は足俣川の川床から、約16mの比高差があり比較的安定していたと考えられる。背後の山林は現在植林されているが、奥の深い削平地が広がっている。

土層の堆積は、約20～25cmの耕土をはぐと、東西（垂直）方向の山側では、小さな礫を含む明茶色の砂質土が、傾斜して約25cm堆積し、現況水田の基盤となっている。谷側では、耕土の下に、茶色系砂質土、砂礫土をはさんで、拳大の礫を含む茶色系砂質土が、約30～33cmの厚さで堆積していて、谷側現況水田の基盤となっている。この層の下部に縄文時代の土器が含まれていた。また、調査で検出した最下層の茶褐色の粘質土層には、木屑や管状植物の茎などが多く含まれている。この層は、調査区谷側に展開する畦畔状遺構の基盤である固くしまる青灰色砂質土の下にもぐり込んでいる。

南北（水平）方向（第4図）の堆積は、耕土の下に礫を含む茶色系砂質土の下に、固くしまった青灰砂質土となっている。この層が検出した畦畔状遺構の基盤層となる。本来この上にのるべき当時の耕作土は、一部でしか検出できず、赤茶色系粘質土が深いところで約8cm堆積していた。

畦畔状遺構

今回検出したのは、25面以上の小区画を囲む畦畔状の遺構である。

調査区の北側と山手にあたる東側では、この区画が検出されず、小区画の広がり、南および段丘の広がる西側に展開しているようだ。調査のミスから削り過ぎて痕跡のみとなってしまった区画があり、調査区に本来あった数は約36区画と考えられる。この区画が、長辺をほぼ東西に合わせて、南北に三列にならんでいる。調査区の西側の列が、おそらく15区画。中の列が11区画。東側の列が9区画となる。

三列にならぶ小区画を区切る畦畔は、青灰色砂質土や茶色系粘土を用いて、南北方向に、ほぼ一直線に作られている。幅40～100cm、高さ4～10cmの台形をしている。

区画を囲む畦畔の状況が、ほぼ完全に検出できた西側の一列では、青灰色砂質土や茶色系粘土を用いた、幅30～80cm、高さ5～10cmの台形状の畦畔で、東西方向に整然と区切られている。これは、直径10～20cmの団子状の粘土の塊を、横に二、三個づつ並べて一列の畦畔が作られている。この塊は、ていねいに密着させてあり、上部は手で撫でたように水平になっていた。

それぞれの畦畔で囲まれた小区画の南北幅は80～125cmで、東西（長辺）の幅は、一部調査区外のためにわからないが、中の一列の主な区画の長辺が500～550cmあることから、今回の調査で検出した小区画は、100×525cm程度の長方形をしていたことがわかる。

南北にならぶ三列の水田面の高低差は、東側と中央が平均約7cm、中央と西側で約8cmを計る。またそれぞれの列の中での高低差は、西側の列が最大約6cm、中央と東側の列が3～4cmである。また一枚の区画内は、ほぼ平坦とみてよく、約3cm前後の起伏差しかない。

また調査では、水を流すための水口かと思われる個所が3ヵ所みられた。

杭 列

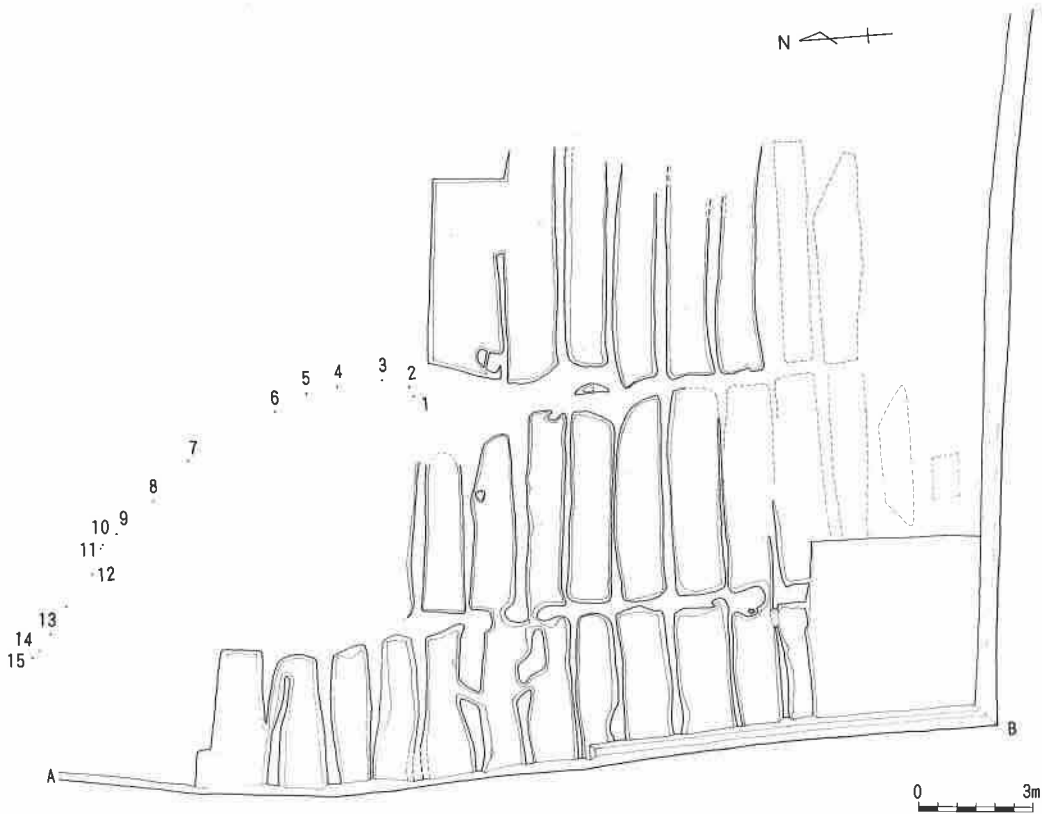
調査区の北半分は、畦畔状遺構は検出されず、茶色系砂質土の下に、腐食した木屑や管状植物の茎を多く含む茶褐色の粘質土層があらわれる。この層が、傾斜しながら畦畔状遺構の基盤層の下にもぐり込んでいることが、東西断面の状況からわかった。

調査で、この茶褐色系粘質土層に打ち込まれている15本の木杭が見つかった。それぞれの杭の間隔は、25～270cmとばらつきがあるが、図のように山裾にそのような形で、弧を描きながら一列にならんでいる。杭1、2や10、11のように近接しているものや、9のように二本の杭が打ち込まれているものもあるが、ほとんどは単独で打たれている。

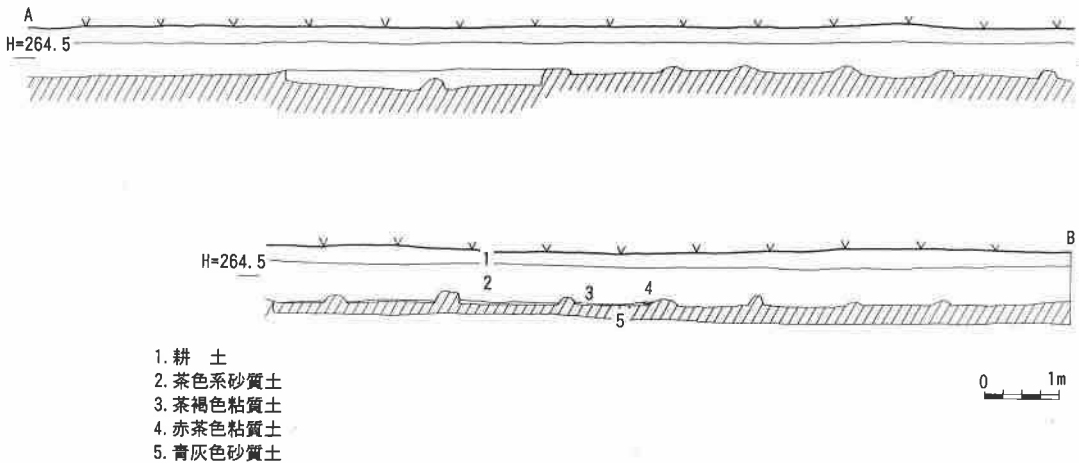
杭は多くが腐食しているものの、この茶褐色系粘質土の上面から残っているもので、この

層か、その上の層から打ち込まれたものと思われる。杭の先端は、粘質土の下のうすい礫層、青灰色粘土、鉄気を含む砂礫層で止まっている。その下の黄色の砂層にとどくものもある。残存する杭の長さは20~40cmを計る。多くはサクラの木が用いられている。

杭列は、段丘の西に広がるとみられる畦畔状遺構を、北から東にかけて囲んでいるようにもみられることから、この遺構となんらかの関わりがあるのではないだろうか。



第3図 検出遺構平面図



第4図 土層断面図

第5章 出土遺物

第1節 土器

内座遺跡の調査で出土したのは、縄文土器と中世の陶器、土師質土器と木製品（杭）である。遺物の総量は整理用コンテナ2箱分に相当する。

ここでは、今回の調査で出土した土器類について報告したい。

縄文土器（第6～9図、図版6～8）

縄文土器はすべて破片で、全体を復元できるものはなかった。また、すべて二次堆積で、畦畔状遺構を埋めていた茶色系砂質土の下層に含まれていた。所属する時期は、後期を中心に一部晩期のものがある。

（1）～（74）は、縄文時代後期に属する土器群である。

（1）は口縁端部をやや肉厚にして縄文を施している。（2）は口縁直下に2条の沈線をひき、沈線間に縄文を充填している。胎土は粗く、0.2cm大の石粒を多く含んでいる。（3）は波状口縁で、焼成があまく摩耗している。

（4）～（13）は、沈線の中に縄文を施す磨消し縄文とよばれる文様をもつ土器で、（6）～（8）は精製土器であるが、焼成があまいために残りが悪い。（12）は、幅約5mmの太い沈線で区画された中に縄文を施文している。内面はていねいに磨かれたあと、指ナデがされている。（14）～（18）も縄文が施されている土器である。

これらの多くは、後期前半の中津Ⅱ式段階に相当する土器群と考えられる。

（19）は、口縁端部を内側に折り曲げ、口縁直下には幅約1cmの低い突帯をつけ、その下に2条の横沈線と2条の斜め沈線が施された土器で、突帯上には幅0.4cmの円形の刺突文をめぐらせている。（20）も同じく2条の横沈線と2条の斜め沈線をもつ。北白川上層Ⅱ式に相当すると考えられる。（21）は摩滅がはげしいが、波状口縁の波頂部につく縦位の突帯と考えられる。縁帯文土器後期の元住吉山式または一乗寺K式に相当するものか。

（22）～（36）は半粗製土器および粗製土器の口縁部である。（29）は肉厚の内反する口縁をもつ。（31）は、器面いっばいに、櫛状工具で縦横に乱雑な線引きがされている。器壁は約

1cmと厚く、口縁端部は平に削られていて、内面はていねいにナデ調整がされている。(32)～(34)は同一個体と考えられる。幅 1cm前後の櫛状工具で、口縁直下に横1条めぐらし、そこから約 2cmくらいの幅をあけて斜め方向に引き下している。(35)も同様の工具で斜めに引き下ろす文様をもつ。これらの土器は、滋賀県能登川町の今安楽寺遺跡の後期土器群のうち、半粗製、粗製土器であるK V～VI群土器に類似のものをみることができる。(36)は(31)の胴部である、やや外側に屈曲しているため、本来の器形は外反する口縁をもつ深鉢になるものと思われる。(37)～(39)は、(32)の胴部である。(40)(41)は櫛状工具で外面調整されている。以下、(42)～(66)は、櫛状工具あるいはヘラ状工具や半載竹管状工具などで、乱雑に引かれた文様を器壁にもつものを取り上げた。

これら、半粗製土器および粗製土器は、中津式の精製土器に伴うものであると考えられる。

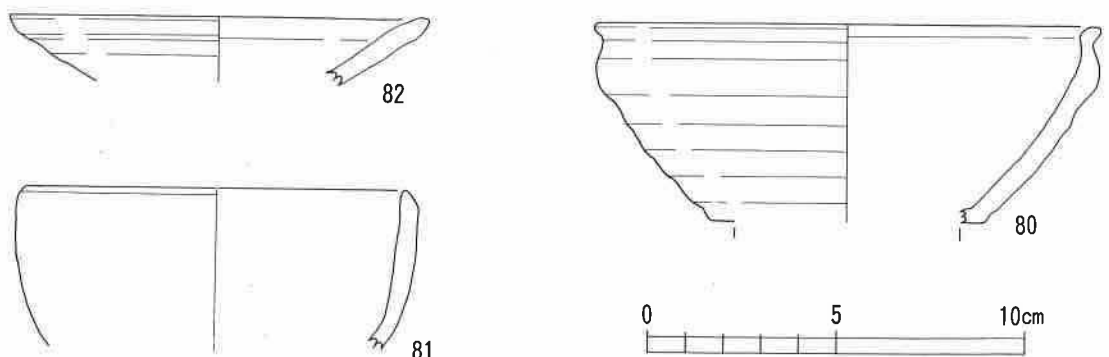
(67)～(74)は、土器の底部である。検出した底部はすべて平底であった。また、(68)(73)のように底部に網代痕が残るものがある。これらは、中津Ⅱ式段階のものとみられる。

(75)～(79)は、縄文時代晩期に属す土器である。(75)は外面を貝殻による条痕文で調整されている。(76)は幅 1.5cmの突帯に、約 2.3cmの長い押圧の楕円形をした刻み目をもつ突帯文土器の胴部で、東海地方晩期最終末の馬見塚式土器あたりに相当すると考えられる。(77)は口縁端部に刻み目をもつ土器である。内面には粘土ひもの巻き上げ痕を明瞭に残す。滋賀里Ⅲ式か。(79)は条痕文土器である。

瀬戸美濃産天目茶碗（第5図80～81、図版8）

中世あるいは近世に所属すると考えられる。(80)は、畦畔状遺構の遺構面直上で検出しており、遺構の年代を示す遺物と考えられる。

(80)は、口径13.5cm、器高は高台が欠けているものの、復元すると 5.5cm前後になると思われる天目茶碗である。腰部から立ちあがる胴部は、ほぼ直線的に外に開き、いったん



第5図 出土遺物（中世）

外方にふくらみをもたせてから、内傾気味に薄く立ちあげ、さらに斜め上方へ外反する口唇部を作っている。したがって、口縁部はS字状のくびれとなる。また、口縁端部はややとがり気味になっている。器の最大径は、口縁部とくびれの下の方のふくらみがほとんど同径で、器高にくらべると口径が広がっていて、全体的に扁平な感じがする。釉薬の色は、光沢のない茶褐色をしている。

器形などから、美濃焼大窯編年のⅢ～Ⅳ期あたりに相当すると考えられ、16世紀中頃から後半にかけてのものであろう。

(81)は口径10.2cmで、残っている器高約4.4cmの丸茶碗である。腰部からほぼ垂直に体部が立ち上がる。口縁端部は、外側を内に削って先をとがらせている。釉薬は黒褐色で、体部は厚くていねいに施されている。近世に属す可能性がある。

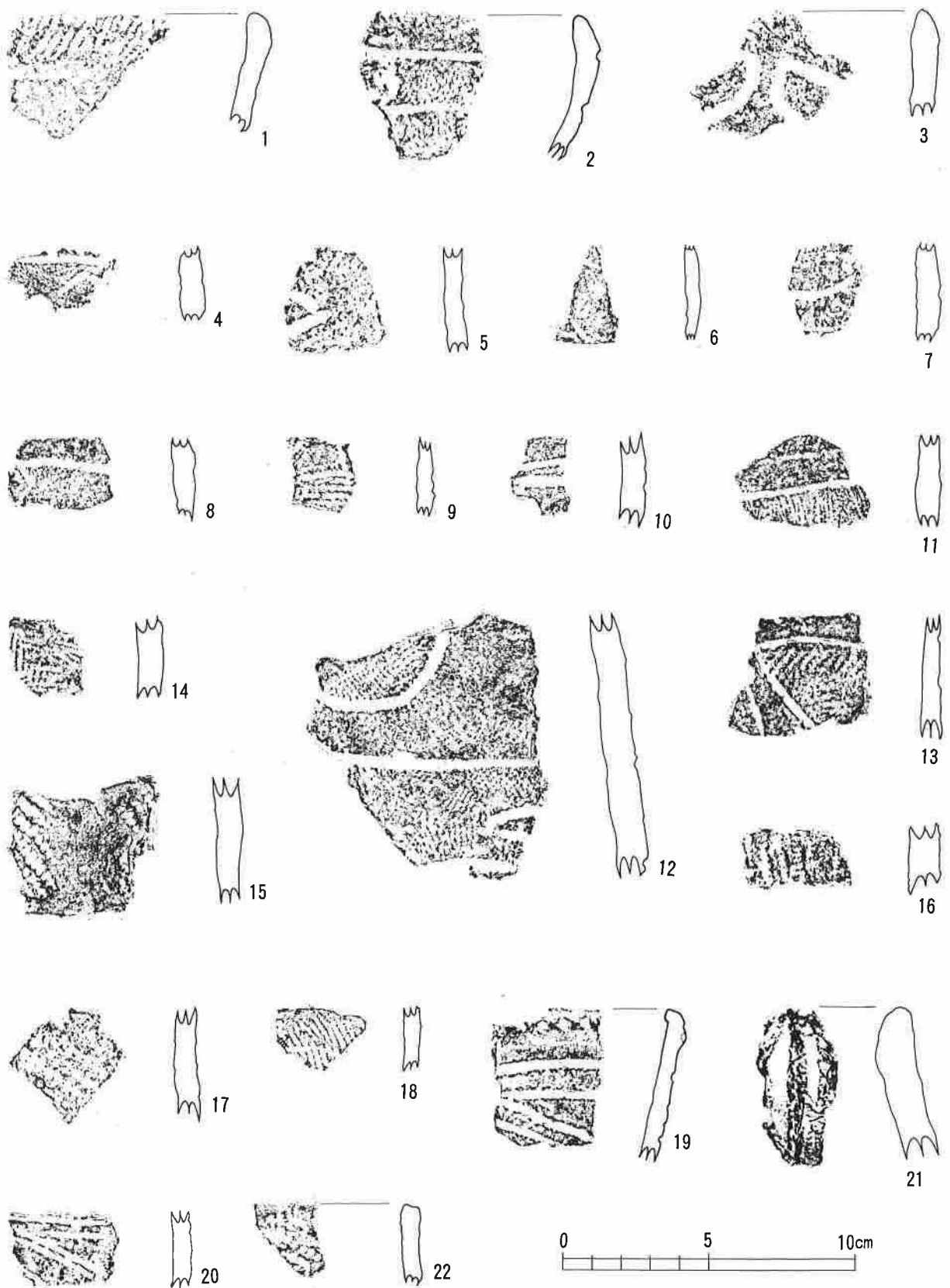
土師質土器（第5図82、図版8）

(82)は、口径11.2cmの土師皿である。器面は内外ともに横ナデで調整されている。時期は不明であるが、(80)(81)と同時期のものか。

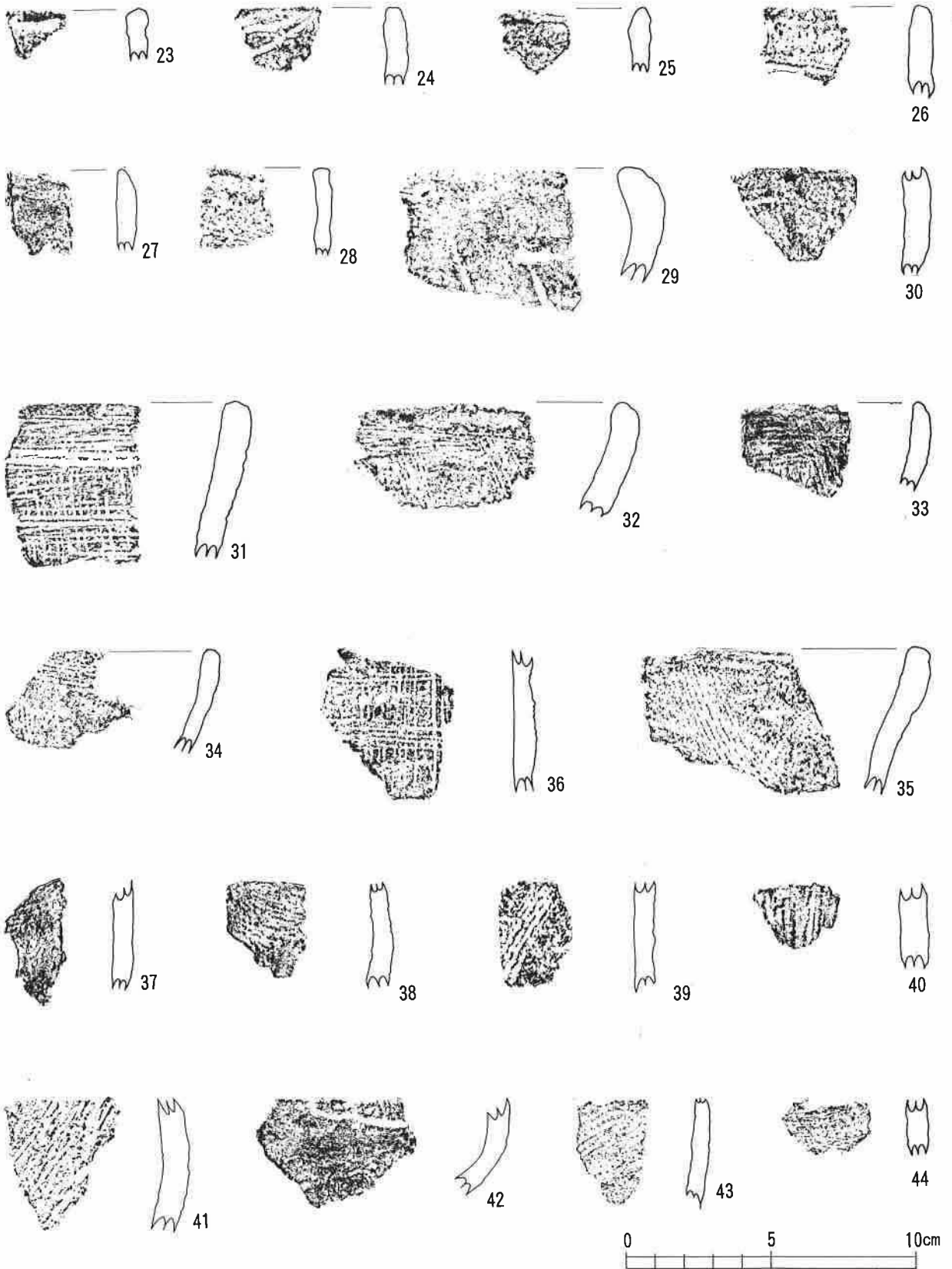
第2節 木製品

出土した木製品は、茶褐色粘質土層に打ち込まれていた15本の木杭がある（第10図）。最も長いのが(12)で、残存長約42.5cm、直径は太いところで5cmを計る。先端は良好に残っているが、上部は先細りして腐食している。(1)は最も短く、残存長約9cm、直径約3.5cmである。ほとんどの杭が腐食していて原形をとどめるものはない。(1)(4)(12)は、光沢のある樹皮がついていて、サクラ材であることがわかる。また、(1)(3)(7)～(12)は、鋭利な刃物でとがらせた先端部分が一部のこっている。

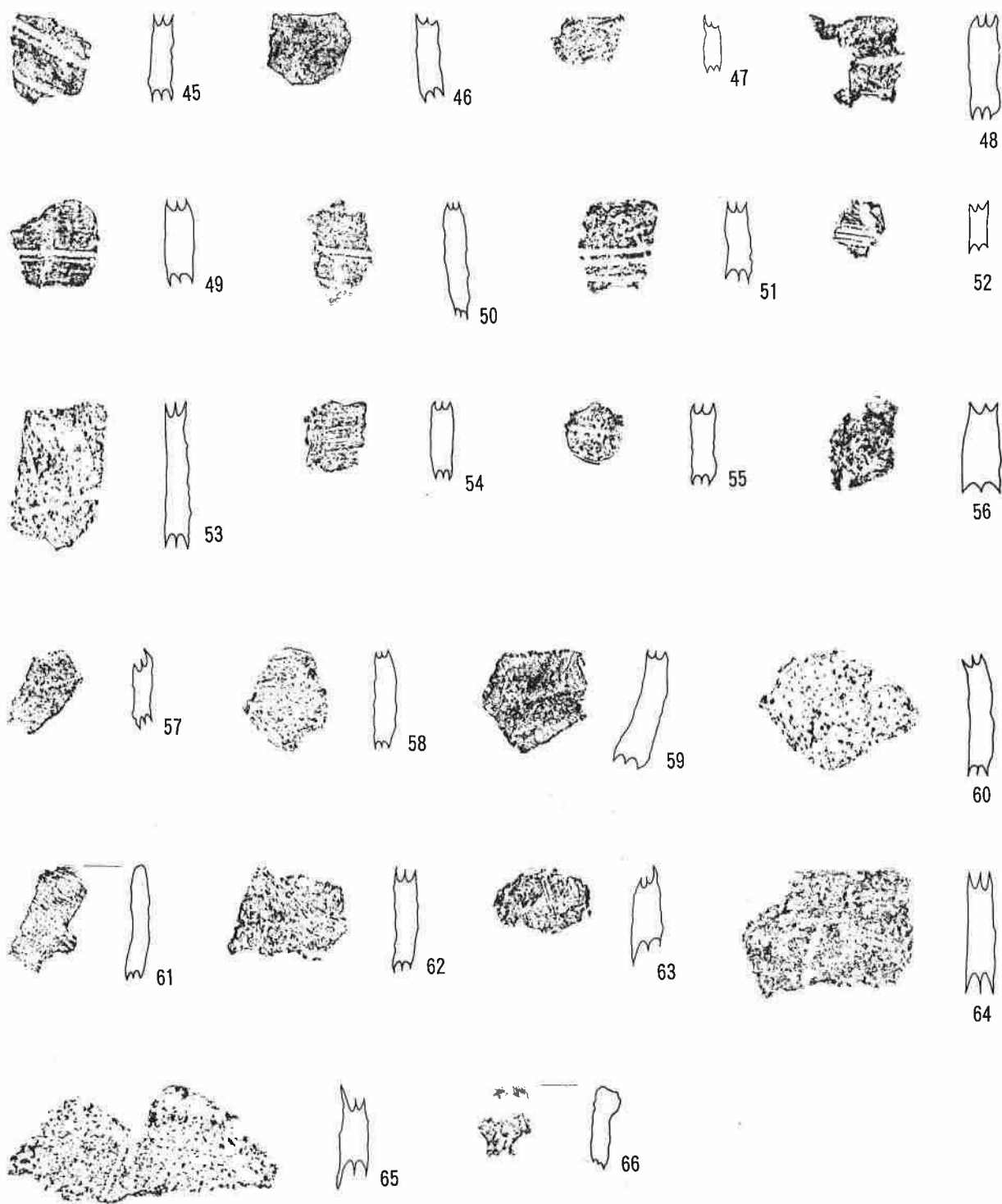
いつのものであるかわからないが、畦畔状遺構を囲む杭列の状況から、畦畔状遺構と同時期の可能性があり、16世紀中頃以降のものと思われる。



第6図 出土土器（縄文時代後期）

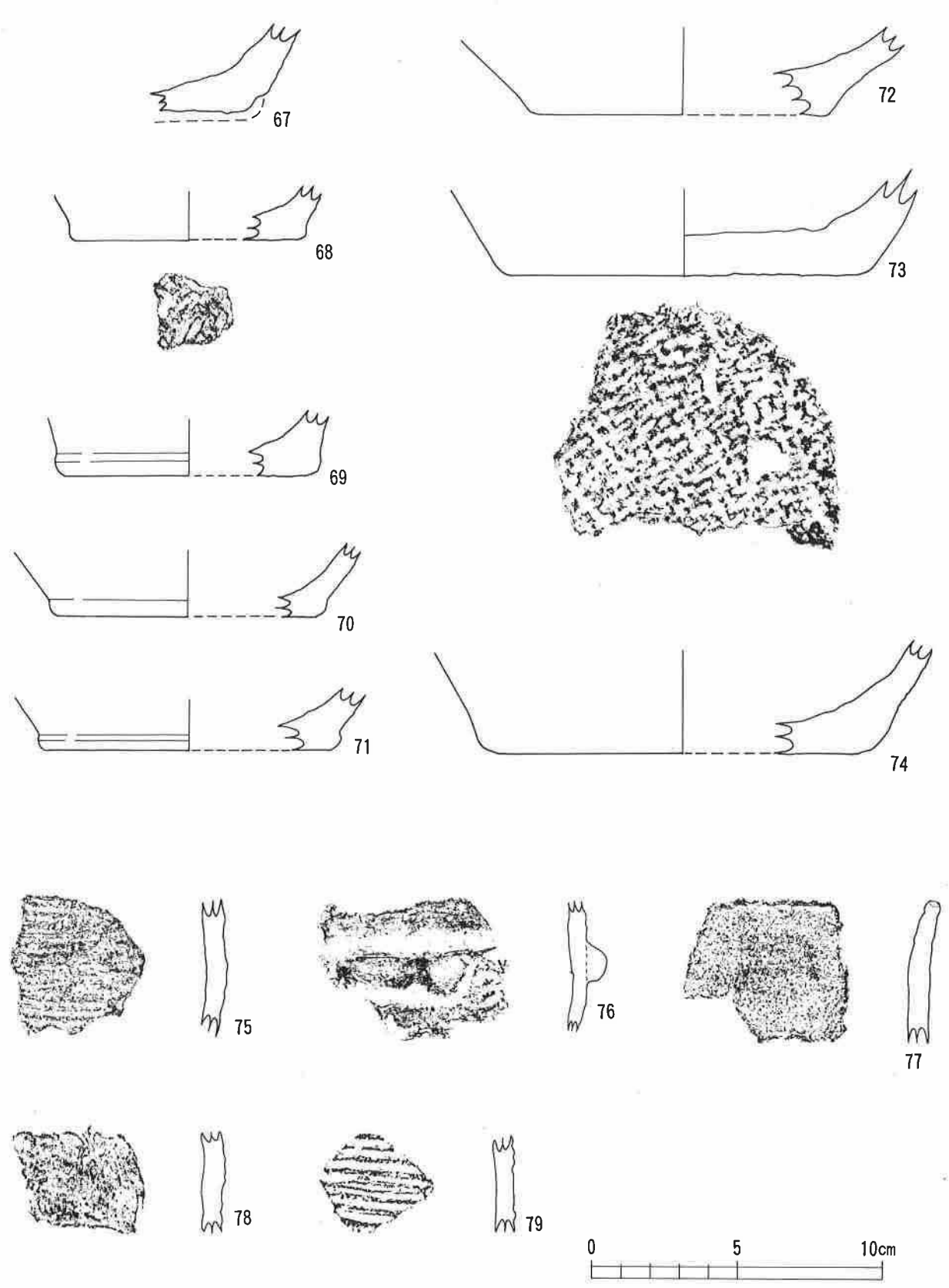


第7図 出土土器（縄文時代後期）

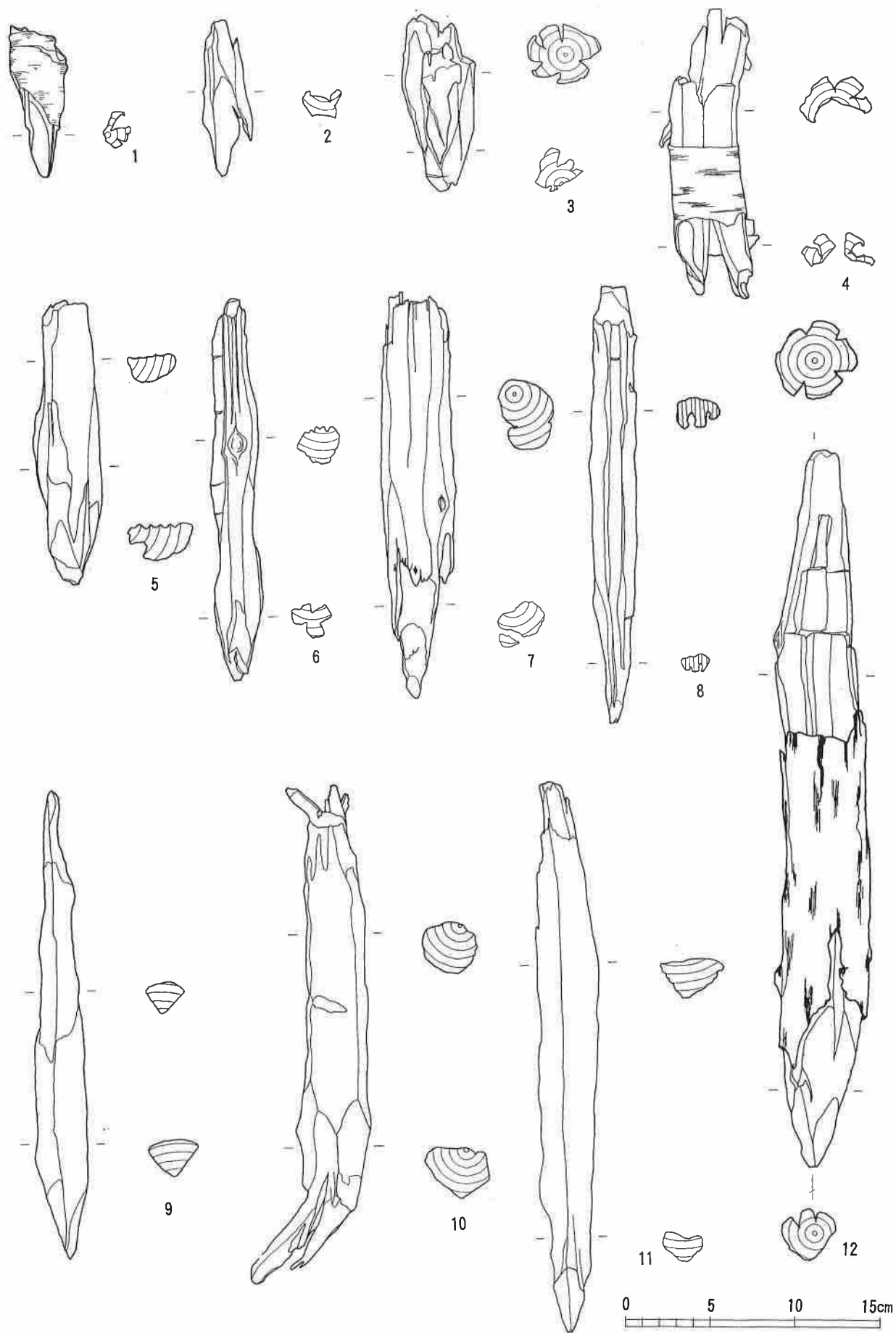


0 5 10cm

第8図 出土土器（縄文時代後期）



第9図 出土土器（縄文時代後期・晩期）



第10图 出土木製品

第6章 水田遺構の植物珪酸体の産状

はじめに

内座遺跡（滋賀県坂田郡伊吹町大字上板並字内座に所在）は、姉川の支流である足俣川左岸の河岸段丘上（標高約 264 m）に位置しており、縄文時代後期～晩期の遺物や室町時代の水田跡が検出された。室町時代の水田跡は、幅約30cm・高さ約10cmの畦畔により、1.2m×5mに区画されている。また、この外側にほぼ同時期と見られる杭列が検出されている。

今回の分析調査では、水田耕作土とその埋土のイネ属に由来する植物珪酸体の産状を明らかにするために植物珪酸体分析を実施し、稲作の様態について検討した。

1. 試料

試料は、調査区西側の畦畔を覆う堆積層と水田耕作土から採取された2点である。（第11図、表1）。なお、表1に示した試料の層相は、当社において観察した結果である。

2. 植物珪酸体分析の分析方法

植物珪酸体は、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.6）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するため植物珪酸体組成の層位的分布図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示す。

表1. 分析試料の一覧

試料番号	試料採取層位	層相	時代性
2-1	畦畔状遺構 埋土	にぶい黄褐色シルト混じり砂礫	室町時代以降
2-2	畦畔状遺構 遺構面土	灰黄褐色礫混じり砂質シルト	室町時代以降

3. 植物珪酸体の産状

結果は、表2・第12図に示す。植物珪酸体は、2試料とも良好に検出される。植物珪酸体化石群集は、試料番号 2-2と試料番号 2-1で若干異なる。試料番号 2-2では、イネ属が多産し、次いでタケ亜科・イチゴツナギ亜科などが検出される。また、本試料では、イネ属短細胞列がわずかながら検出される。これに対して、試料番号 2-1になると、イネ属の出現率が低下し、キビ族短細胞珪酸体・タケ亜科機動細胞珪酸体・ウシクサ族機動細胞珪酸体が増加する。

4. 考察

畦畔を覆う土層（試料番号 2-1）および水田耕作土（試料番号 2-2）ともイネ属に由来する植物珪酸体が多産する。その出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも試料番号 2-2の方が試料番号 2-1よりも高率である。これより、試料番号 2-2で検出された植物珪酸体は、上層から落ち込んできた可能性が低い。また、組織片の存在を示唆する短細胞珪酸体列が検出されている。このような植物珪酸体の産状は、本遺構が水田跡とされていることと調和的である。この他、周辺には、タケ亜科・コブナグサ属・イチゴツナギ亜科・シバ属などのイネ科植物が生育していたと推定される。これらの種類の中でコブナグサ属が湿った場所に分布する仲間を持つことから、水田の周辺の湿った場所にコブナグサ属が生育していた可能性がある。

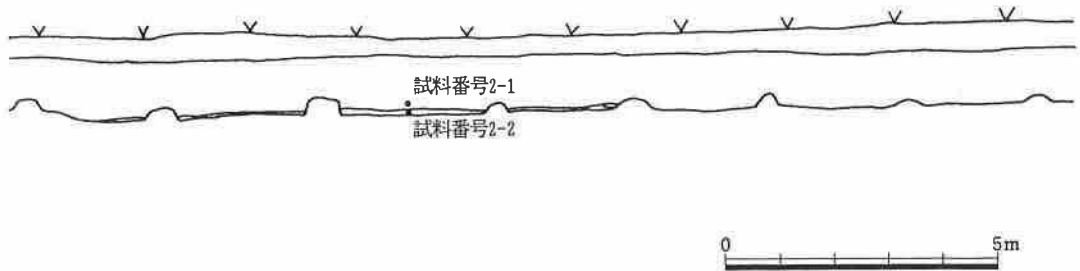
さらに今後、土壌断面構造の観察さらに種実遺体分析など、その他の自然科学調査も併せて実施することにより、乾田型水田の判定や水田雑草などについて検討を加えることが可能となり、より詳細な水田の様態について明らかにされるだろう。

引用文献

近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p. 31-64.

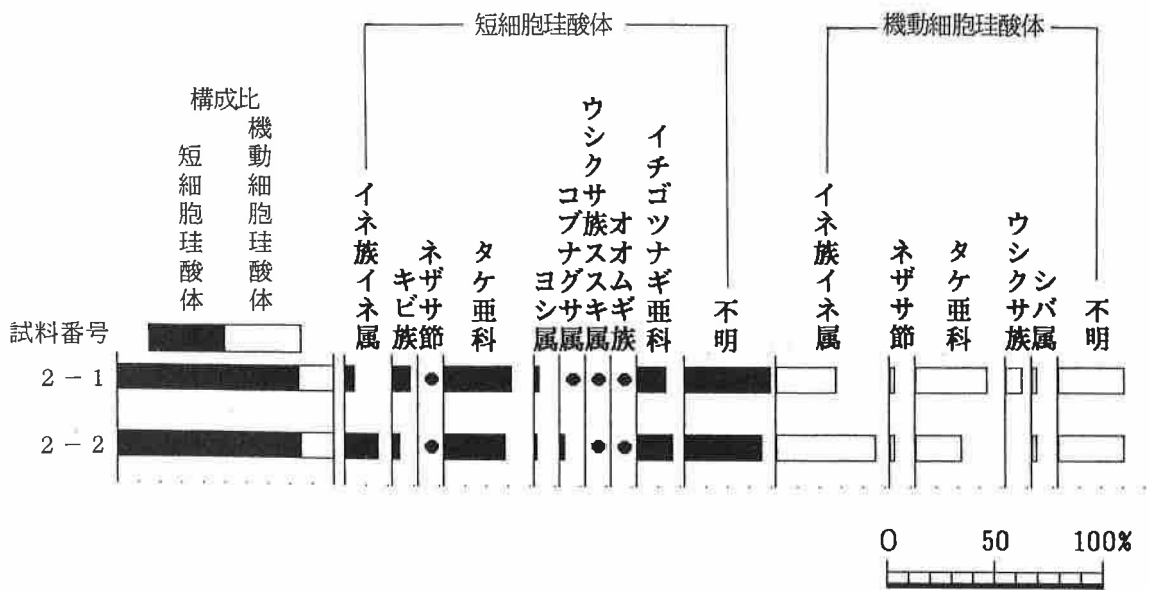
表2. 植物珪酸体分析結果

種 類 (Taxa)	試料番号	2-1	2-2
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属		26	93
キビ族		47	18
タケ亜科ネザサ節		1	1
タケ亜科		185	179
ヨシ属		9	7
ウシクサ族コブナグサ属		5	10
ウシクサ族ススキ属		3	6
イチゴツナギ亜科オオムギ族		5	1
イチゴツナギ亜科		78	102
不明キビ型		92	103
不明ヒゲシバ型		59	63
不明ダンチク型		80	58
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属		30	51
タケ亜科ネザサ節		2	2
タケ亜科		37	24
ウシクサ族		8	-
シバ属		2	2
不明		34	34
合 計			
イネ科葉部短細胞珪酸体		590	641
イネ科葉身機動細胞珪酸体		113	113
検 出 個 数		703	754
組 織 片			
イネ属短細胞列		-	2



第11図 試料採取地点の土層断面

●は、試料採取層位を示す。



第12図 植物珪酸体組成の層位的分布図

第7章 ま と め

内座遺跡では縄文時代後・晩期の土器と、室町時代のものと考えられる遺構およびこれに伴う16世紀の遺物などが発見された。ここでは、これらを縄文時代の土器群と、水田跡と考えられる畦畔状遺構の2つの観点から、今回の調査で新たに理解されたことや、今後の課題などについて考察し、調査のまとめにかえたい。

縄文時代 出土した縄文土器は、すべて二次堆積のもので、おそらく山崩れなどにより堆積したものと考えられる。調査区の北側斜面の約18m上段に約150m×50mの平坦地があり、東側背後約65m上には、約180m×75mの平坦地がある。どちらも現在は山林になっているが、おそらく調査区の段丘より高位にあるこれらの平坦地に、出土した縄文土器がもともと所属していた縄文遺跡が存在するものと考えられる。

縄文土器は、出土量も少なく細片が多いため、この遺跡の特徴を雄弁にものがたる資料にはなりえないが、わかる範囲で概略を述べ、今後の資料の増加をまって、縄文遺跡の姿を解明していきたい。

あえて土器の型式から内座遺跡の時期的な流れをとらえるなら、後期前半の中津Ⅱ式からはじまり、あいだをおいて後期中頃の北白川上層Ⅱ式、元住吉山式がわずかにある。その後、空白期間をおいて晩期中頃の滋賀里Ⅲ式と晩期最終末の馬見塚式が各1点みられる。底部および比較的量の多い半粗製や粗製土器が、中津式にともなうものと考え、当縄文遺跡の中心を後期前半代におくことができる。

本町内には、遺跡地図によると18ヵ所の縄文時代の遺跡がある。遺跡の分布は、内座遺跡のように姉川やその支流沿いの河岸段丘に立地するものが6遺跡、伊吹山西南麓の扇状地上にあるものが11遺跡、残りの1遺跡は伊吹山頂の遺跡である。同じ町内で、「姉川上流河谷部」（以下、姉川上流とする）と「伊吹山麓扇状地」（以下、伊吹山麓とする）という2つの遺跡群に分けることができる。そのうち土器型式から時期がわかるのは、姉川上流の起し又遺跡、内座遺跡、伊吹遺跡と伊吹山麓の井の田遺跡、杉沢遺跡の5遺跡である。

姉川上流では、起し又遺跡で早期の押型文土器末期のものが1点みついているものの、おそらく集落が営まれたのは、起し又遺跡において中期初頭（船元Ⅰ式）からである。

その後継続しながら、中期末（北白川C式）の遺物が最も多く出土している。おそらくこの時期に安定した集落が営まれていたものと思われる。その後、後期後半（元住吉山式）までつづき、終焉をむかえる。内座遺跡は、起し又遺跡が最盛期（北白川C式）をむかえた直後の後期初頭（中津式）に集落がはじまり、この時期を中心にして、その後とぎれながら晩期の終末までみられる。ただし、集落といっても、起し又遺跡最盛期をのぞけば、数家族以下のキャンプサイト程度のものである。起し又遺跡と内座遺跡は直線距離で約3.8kmで、中期末に起し又遺跡が最盛期をむかえたあと、なんらかの理由で、そのうちの一部が後期初頭に内座遺跡のある段丘に移って、新たに生活をはじめたと考えることができるのではないだろうか。しかし、これらの調査では、今のところ土器以外に、住居跡や埋葬施設、祭祀跡など、人々の営みの痕跡を発見していない。今後の課題としたい。

伊吹山麓では、姉川上流よりも約400年ほど遅れて、中期中頃（咲畑式）に井の田遺跡で人々の営みがはじまっている。井の田遺跡では中期末（北白川C式、山の神式）までつづいたあと、後期の一時期営まれ、廃絶している。その後伊吹山麓では、空白の期間があり、晩期になって、井の田遺跡からややくだった扇状地の扇端部で、杉沢遺跡が晩期前半（滋賀里Ⅱ式併行）と晩期末（馬見塚式）の二時期に集落を営んでいる。杉沢遺跡では、晩期終末の合わせ口土器棺の出土や、多様な磨製石器の存在など、町内の縄文遺跡ではもっとも内容の濃い遺物や遺構が出土している。坂田郡の縄文遺跡の最後を飾る遺跡である。⁷

なお、坂田郡全体でみると、縄文時代前期に、米原町の磯山城遺跡、筑摩佃遺跡、入江内湖遺跡、入江内湖西野遺跡、近江町の法勝寺遺跡、高溝遺跡、顔戸遺跡など湖岸の遺跡が繁栄したあと、中期になってようやく、伊吹山麓や姉川上流の山間部にまで、縄文人の生活圏が広がってきたことが、出土土器からみてとれる。⁸

まだまだ十分な資料がそろっていないため、伊吹山麓ならびに姉川上流に展開した縄文社会を解明するには、今後の調査をまたなければならない。

水田遺構（畦畔状遺構） 第6章の植物珪酸体分析の結果、今回の調査で検出した畦畔（けいはん、あぜ）状の遺構は、堆積していた水田耕作土から、多量のイネ属の植物珪酸体が検出され、イネ属の組織片の存在が予想できたことから、水田跡とみてまちがいない。その時代は、水田遺構面で出土した室町時代の天目茶碗を唯一のよりどころとして、16世紀中頃以降のものと考えている。

1930年以降、日本における稲作農耕の起源は、弥生時代になって、大陸・半島から石包丁をはじめ各種の磨製石器とともに、稲作農耕も一緒に入ってきたといわれていた。その

後、1980年に佐賀県菜畑遺跡で縄文時代晩期中頃に位置づけられる水田跡が確認され、現在では、北部九州のみならず、中国・四国地方や大阪湾沿岸部まで、晩期（弥生時代早期）の水田や稲作の存在をうかがわせる遺跡が見つかっている。また、1981年に青森県の垂柳遺跡で、弥生時代中期の水田跡が発見され、1986年には弘前市砂沢遺跡で東北最古（弥生時代前期）の水田跡が発掘された。これら水田遺跡の立地は、低地に限らず、丘陵裾の谷開口部（菜畑遺跡）、低台地縁辺から沖積地にかけての緩傾斜地（福岡県板付遺跡）、広大な扇状地上（垂柳遺跡）や扇状地末端（登呂遺跡）、台地間の細長い谷地（群馬県日高遺跡）など、弥生時代には、すでにさまざまな地形に対応していたことがわかっている。

内座遺跡の水田遺構の立地は、山間部の高位段丘上であり、水の供給と確保という、水田経営に必要な不可欠な条件を得にくい地形にある。おそらく、灌漑用水を導入して開田されたものと考えられる。

植物珪酸体分析で、湿った場所に分布するコブナグサ属の植物珪酸体が検出されたことは、水田の周辺にそのような場所があったことを示している。調査区の北側で、腐食した植物の管状の茎を多く含む粘質土層を検出しているが、ここが生育していた湿った場所であったのかもしれない。水田耕作土からコブナグサ属の植物珪酸体を検出したことは、この粘質土層に打ち込まれていた杭列が、水田遺構と同時期である可能性を示唆しているのではないだろうか。この杭列が、水田経営の灌漑用水に関連したものかもしれない。

また、検出した水田遺構の一区画の面積は、わずか 5㎡という極端に狭い小区画であった。これは、水田内に一定の水をはって稲の生育をうながすという本来の目的から、当遺跡のような傾斜した段丘に田を開く場合、田の水の深さを均平に保つための手段として取られたものと考えられる。また、一度に広い面積を均平化するのは、たいへんな土木量を必要とするので、その軽減のため、傾斜の度合いに応じて必然的に小区画にせざるをえなかったのではないだろうか。現在、一区画が10㎡前後から数10㎡程度の小区画水田は、弥生時代から、農業技術の進んだ奈良・平安時代になっても、広大な平野部においてさえ常識的と考えられている。⁹

今回の調査で検出した水田遺構は、試掘の結果からこれより下に先行する水田がないとみられることから、室町時代中頃になって新たにこの地に拡大された水田ということができるのではないだろうか。そしてある時期に、背後の山の崩壊によって埋没し、現在の水田が新たに開田されたものと考えられる。姉川上流山間部の水田開発を考えるうえで貴重な資料を得られた調査となった。

〈注釈〉

- 1 高橋 1992
- 2 伊吹町史編さん委員会編 1992
- 3 注釈1と同じ
- 4 高橋 1993、6年度調査分については現在整理中である。
- 5 柏倉 1936
- 6 木村編 1991
- 7 小林他 1938、用田 1988
- 8 第6回企画展シンポジウム資料 1994
- 9 高谷、工楽 1988

〈参考文献〉

（縄文土器）

- 植田文雄 1990 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集 今安楽寺遺跡』能登川町教育委員会
玉田芳英 1989 「中津・福田KⅡ式土器様式」（『縄文土器大観』4）小学館

（中世陶器）

- 兼康保明 1988 『肥田城遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・県文化財保護協会
柴垣勇夫 1991 「志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』10）

- 田口昭二 1983 『美濃焼』（考古学ライブラリー17）ニュー・サイエンス社

- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』）

（水田遺構）

- 金田章裕 1987 「古代・中世における水田景観の形成」（『稲のアジア史』3）小学館

- 工楽善通 1982 「西日本の水田遺構」（『考古学研究』29-2）

- 1983 「水田遺構発掘の経過と現状」（『地理』28-10）

- 1991 『水田の考古学』 東京大学出版

- 高谷好一、工楽善通他編 1988 『水田遺構集成』 農耕文化研究振興会

- 辻広志他 1979 「45.守山市服部遺跡の弥生前期水田址」（滋賀文化財だより）

- 能登健 1983 「小区画水田の調査とその意義」（『地理』28-10）

- 八賀晋 1983 「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」（『地理』28-10）

（その他）

- 伊吹町史編さん委員会編 1992 『伊吹町史 自然編』伊吹町

- 柏倉亮吉 1936 『滋賀縣史蹟名勝天然記念物概要』

- 木村至宏編 1991 『滋賀県の地名』（日本歴史地名体系25）平凡社

- 小林行雄他 1938 「近江坂田郡春照村杉澤遺蹟」（『考古学』9-5）

- 用田政晴 1988 『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』伊吹町教育委員会

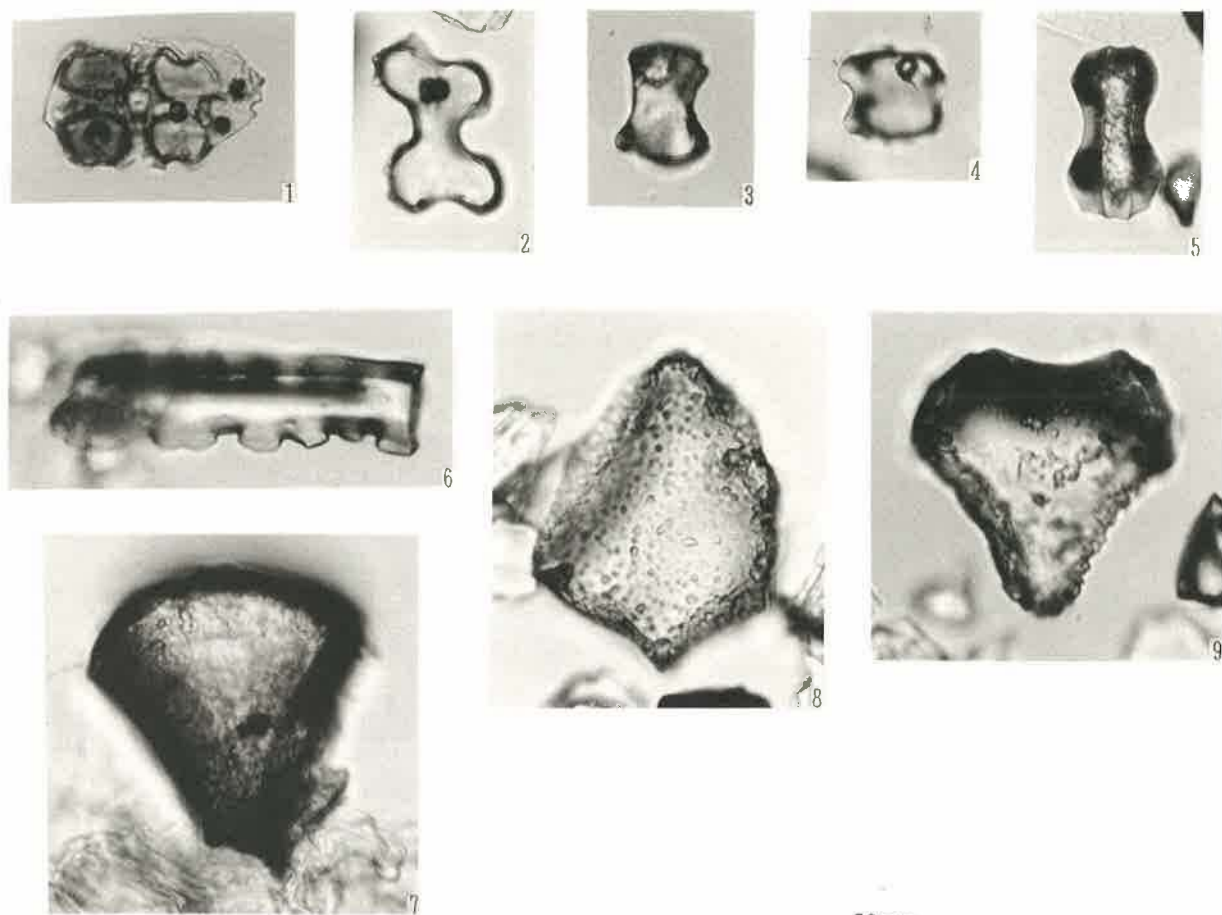
- 高橋順之 1992 『伊吹町内遺跡分布調査報告書』伊吹町教育委員会

- 1993 『起し又遺跡発掘調査報告書』伊吹町教育委員会

- 1994 「石臼生産遺跡」（『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』）伊吹町教育委員会

- 第6回企画展シンポジウム資料 1994 「古代文化の交差点」安土城考古博物館

圖 版



- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号2-2) | 2. キビ属短細胞珪酸体 (試料番号2-2) |
| 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2-2) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号2-2) |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号2-2) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2-2) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号2-2) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号2-2) |
| 9. シバ属機動細胞珪酸体 (試料番号2-2) | |



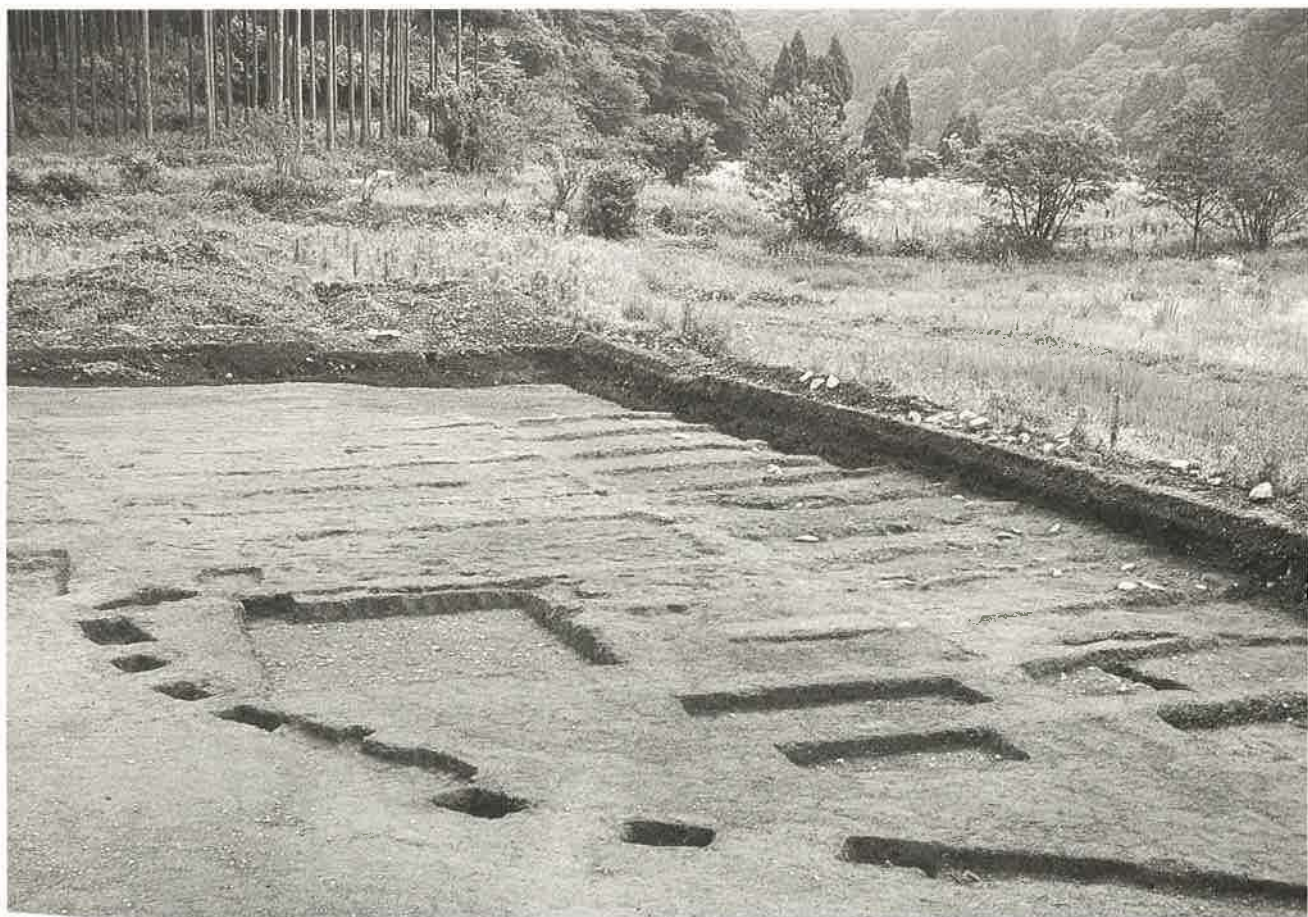
調査地遠景（段丘上中央付近）



調査前風景



調査風景



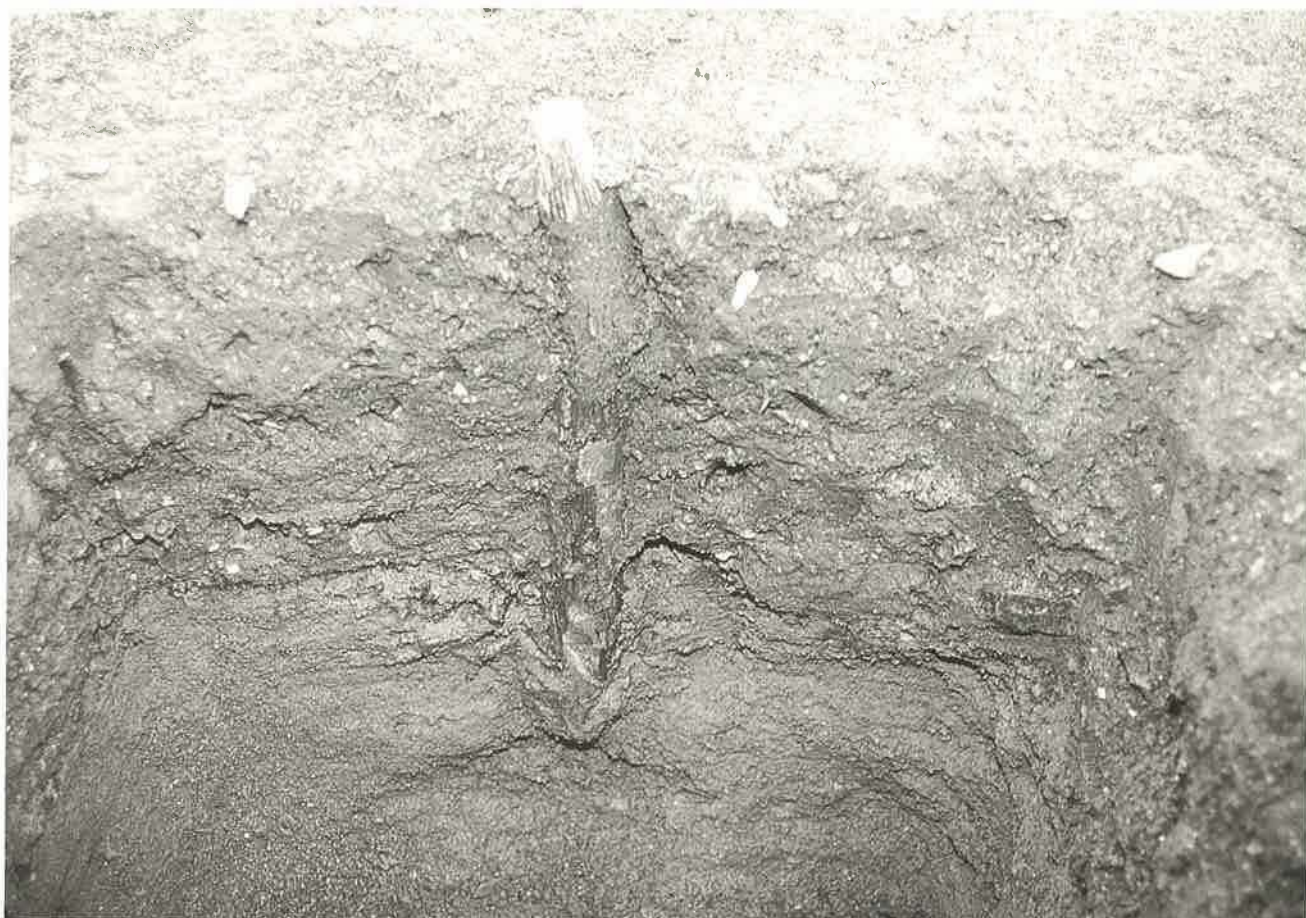
検出遺構全景（北から）



畦畔状遺構（南から）



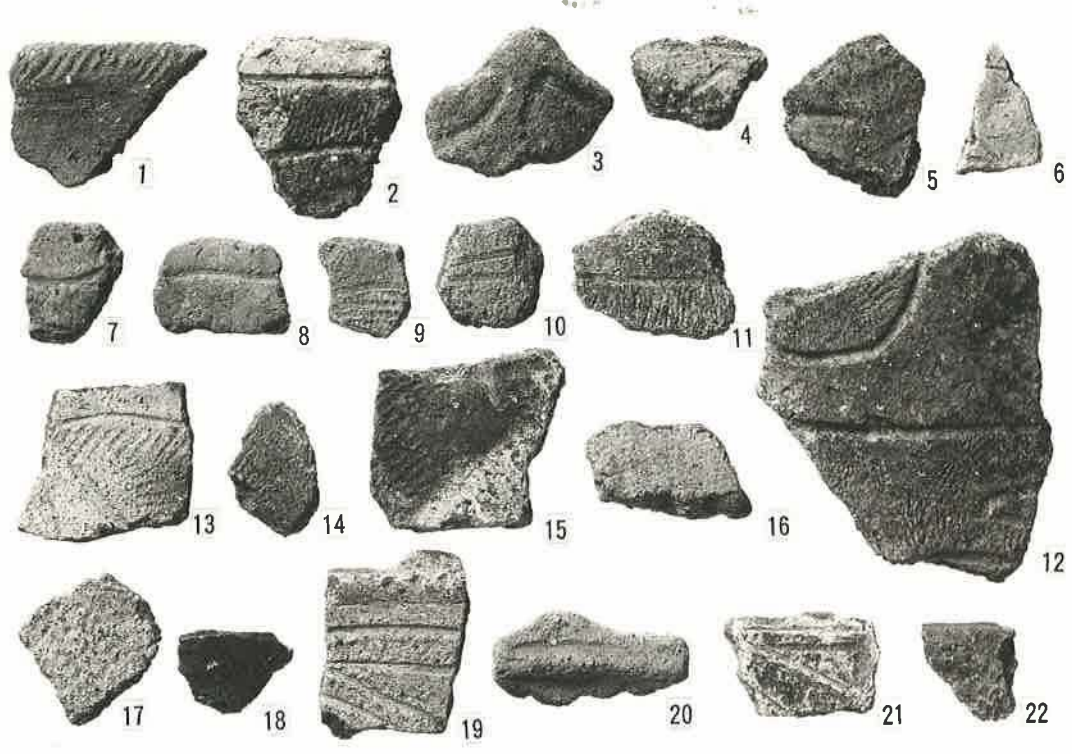
畦畔状遺構



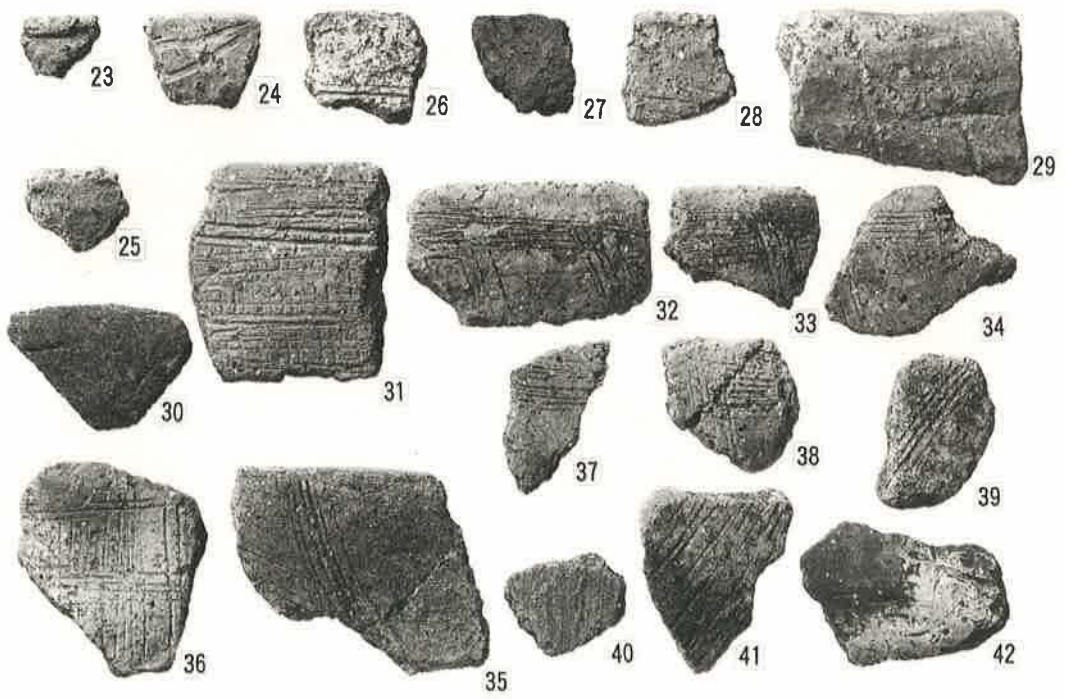
杭出土状况



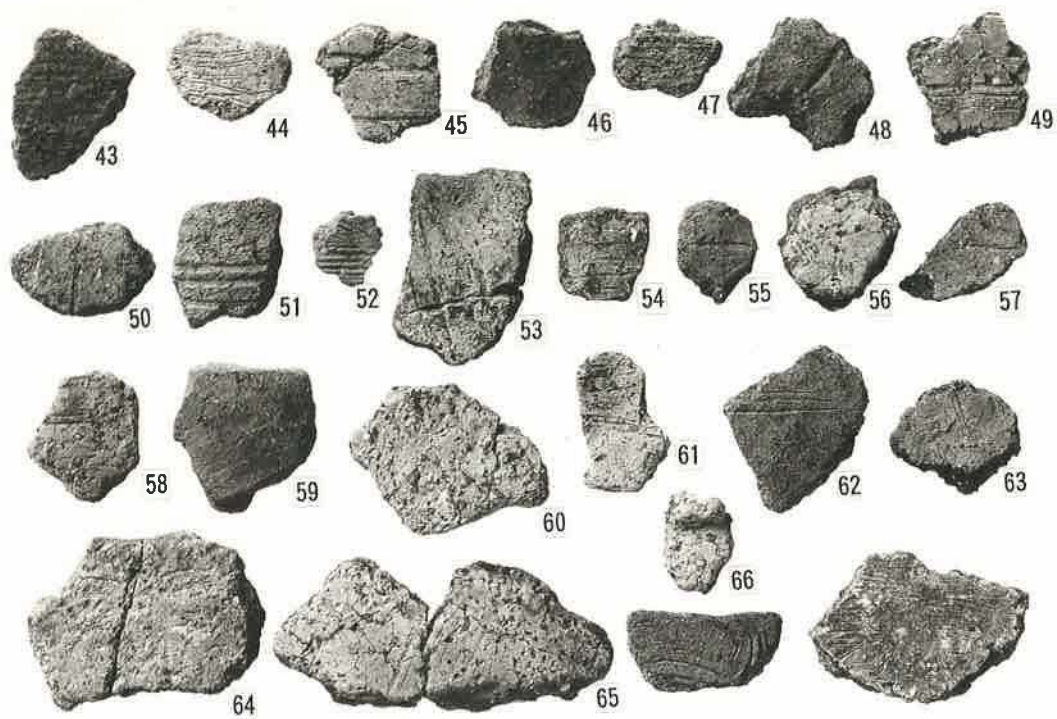
調査区断面



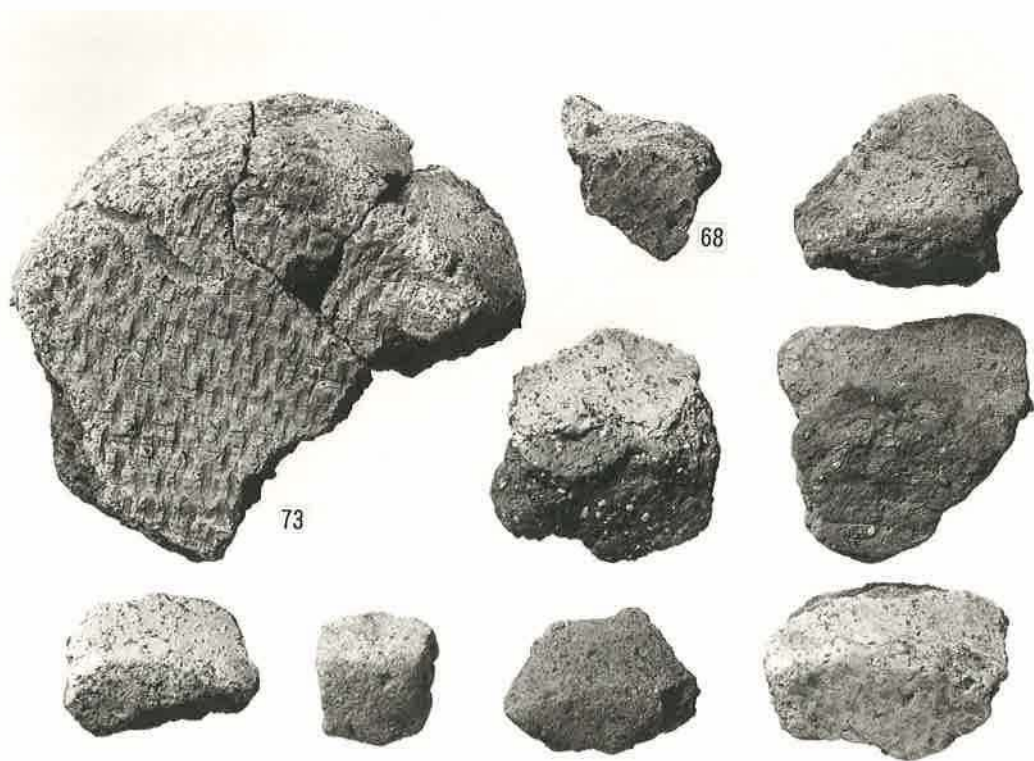
出土土器（後期）



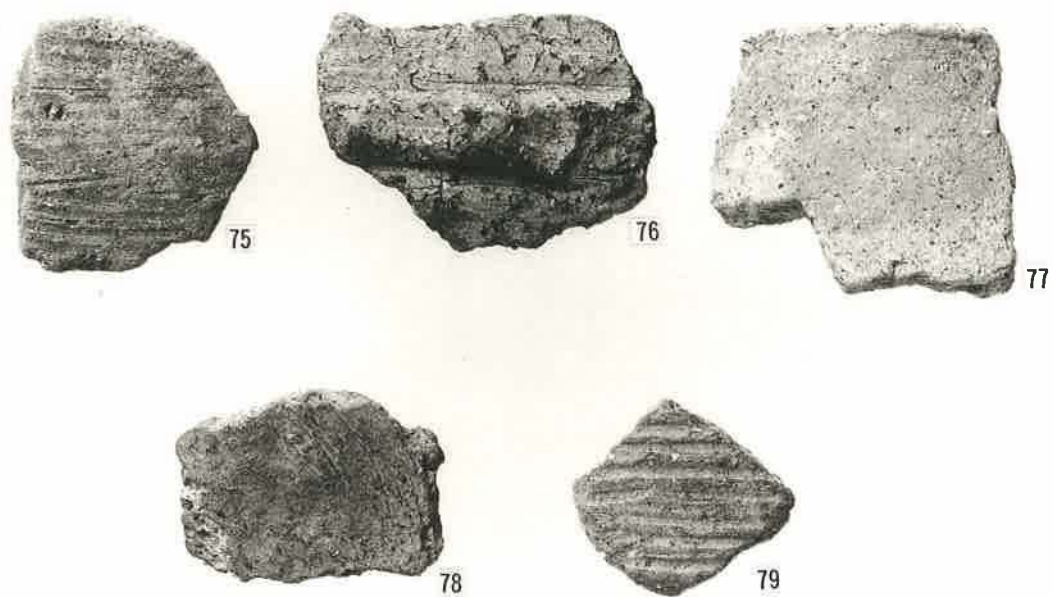
出土土器（後期）



出土土器（後期）



出土土器（底部）



出土土器（晚期）



出土遺物（中世）

報告書抄録

ふりがな	ないざ いせき はくつちょうさほうこくしよ							
書名	内座遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	高橋順之							
編集機関	伊吹町教育委員会							
所在地	〒521-03 滋賀県坂田郡伊吹町春照37 TEL 0749-58-1121							
発行年月日	西暦 1995年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ないざ いせき 内座遺跡	しがけん さかたぐん 滋賀県坂田郡 いぶきちょう かみいたなみ 伊吹町上板並	254622	12	35度 26分 40秒	136度 21分 55秒	19940510 ~19940708	900	ほ場整備 に伴う調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
内座遺跡	水田	室町時代 後半	小区画水田25面 杭列	縄文土器 中世陶器 土師器				

伊吹町文化財調査報告書第9集
内座遺跡発掘調査報告書

1995年 3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会

印刷 垂井日之出印刷

